

事例13:ふれ愛コンサートを通じての地域との連携

発表テーマ:地域との連携

事業所名:ワークスペースななかまど

担当者:統括 柿本 助宝、総務 加々良 舞

施設・事業所紹介

就労継続支援 B 型事業所。西明石にて支援を行っています。定員 20 名、主な作業内容は手芸品の加工・キット作りで、難病などのため通所できない方への在宅作業の支援やひきこもりの方の社会復帰にも力を入れています。

【取組内容について】

1 取組を行ったきっかけ

- はじめに「企画書」を作成して、コンサートの意義を 8 つの自治会長を前にプレゼンテーションを行い、賛同を得ました。学校側と交渉し、地元の誰もが知っている、小学校の体育館にて開催できることとなりました。物販については、初めは許可が難しいということでしたが、和坂校区にお住いの135Eネットの副理事長の協力もあり、障がい者施設・事業所の自主製品・授産品の物販について許可を得ることができました。
- 第1回目は、震災復興のために頑張っている東北の人達にエールを送りたい、応援したいという思いを込めて3月11日に決まりました。
- 「和坂に住むすべての人が笑顔と希望に溢れる街づくりに参加できるように」との思いから実行委員会を結成し、スタートしました。

2 具体的な取組内容

- 全自治会長の賛同のもと、コンサートを開催することとなりました。プログラムについてはアンケートを取り、曲目を決定しました
- 和坂校区、地元の方たちが育ち学んだ小学校をコンサート会場に選びました(誰もが知っている、また、思い出のある場所)。
- 「ワークスペースななかまど」の利用者と職員がステージに立ち、ピアノとバイオリンの伴奏で「あの素晴らしい愛をもう一度」を熱唱しました。
- 体育館の後方には、木の根学園などの地元の障がい者施設による物販ブースが設けられました。
- 車いす対応のエレベータを活用し、身体の不自由な方にも多数ご参加いただきました。
- 会場設営、準備、片付けまで、自治会役員と障がい者施設職員と地元住民で行いました。
- 135Eネットの協力を得ることが出来ました。
- 50台のバイオリンを用意。参加者がバイオリンを体験することが出来ました。



3 成果と評価

毎年3月に、和坂小学校の体育館をお借りして開かれるコンサートには、200名を超える地元の住民が足を運んでくださいます。定着しつつある「ふれ愛コンサート」、令和5年の今年はバイオリンとピアノ、三味線のコラボレーションを企画し大変好評でした。

4 今後の課題、他の施設・事業所へのアドバイスなど

和坂校区にあるまちづくり協議会との連携によって、地元住民と障がい者施設利用者との交流の場が出来るようになりました。コンサートの他にも、1月に小学校校庭で実施される左義長(餅つき)や納涼祭、和坂マルシェ、防災訓練等の行事に参加させていただいています。

障がい者が地域で働き、地域で自立していくためには、我々のように施設で働く職員が、様々な行政機関と連携し、協力体制を組むことが大切だと考えます。障がいの有無に関係なく「この地に生まれてきてよかった」、「この街に来てよかった」、「ここが私の故郷です」と胸を張って言えるような街づくりのために少しでも貢献できればと考えています。

【参考資料など】

- 和坂まちづくり協議広報誌
- 135E ネット(明石障がい者地域生活ケアネットワーク)西明石ブロック報告

事例14:新型コロナウイルス感染症の対応について

発表テーマ:新型コロナウイルス感染防止

事業所名:障害者支援施設博由園

担当者:生活支援員 栗原 祥子

施設・事業所紹介

主に身体に障害を有し、在宅生活が困難となった方に、食事や入浴等の生活支援や健康管理、リハビリテーション等を行う施設入所・生活介護サービスを提供しています。

また、介護者の冠婚葬祭や休養等に、短期間の入所による生活支援を行います。

施設入所、短期入所共に全室個室(2階男性棟:30名、3階女性棟:30名)、浴室:2階
施設入所・生活介護:定員 52 名 短期入所:定員 8 名

【取組内容について】

1 取組を行ったきっかけ

職員が新型コロナウイルスに罹患した後、支援にて接触した利用者に感染し、陽性者が発生したことから、取り組みを行いました。

2 具体的な取組内容

1. 陽性者への対応

- ① 各フロアの端に陽性者専用の居室を用意。廊下にパーテーションを設置し他利用者との隔離を行いました。
- ② 居室に入る際は、個人用防護具(ガウン、マスク、フェイスシールド、手袋)を必ず着用。入室時間は 15 分以内を目安とし、介助者と陽性者の接触時間を極力減らし、対応職員も出来る限り固定しました。
- ③ 居室からベランダ、または外階段へ出る事が出来、階段は回廊式で上下に繋がっている為、使用済みの個人防護具や、陽性者が使用したオムツ、衣類、使い捨て食器などは、ベランダにゴミ箱やバケツを設置し処理しました。またそれらの汚染物は外階段を使用し、1 階の廃棄場所まで捨てに行く事としました。
- ④ 行動障害を有する利用者については、嘱託医に相談、指示のもと協力医療機関への入院調整を行いました。

2. 他利用者への対応

- ① 非感染利用者は各居室のドアを閉め過ごして頂くよう依頼し、他者との接触を極力減らすようにしました。
- ② 感染者が発生した棟の入浴は控え、清拭等にて対応を行いました。
- ③ 日中活動やリハビリテーションは中止し、職員が各棟を移動する際には保健所の指導のもと、消毒等感染症対策を徹底しました。
- ④ 短期入所利用者の食事は居室もしくは入所利用者が摂取した後とし、接触する機会を極力減らしました。

- ⑤ 利用者全員 1 日に 4 回の検温を実施。37.5℃以上の発熱で感染症対策とし、嘱託医の指示のもとコロナ抗原検査を行い、早期発見に努めました。

3 成果と評価

- 陽性者が同時発生した最大の人数が 3 人に留まり、クラスターには至りませんでした。
- 初めの陽性者が判明してから、2 か月弱で収束しました。

4 今後の課題、他の施設・事業所へのアドバイスなど

- 陽性者が発生した際速やかに対応を行う事が出来る様、BCPを含め職員全体へ周知を図っていきたいと考えています。
- 今後法改正の動向を注視し、適時BCPや感染症マニュアルの見直しを図っていく必要があります。

事例15:利用者への支援方法・活動充実化の推進とワークライフバランスの推進

発表テーマ:健康維持など／人材育成／離職防止・定着支援
／業務の効率化／職員生き生き支援

事業所名:博由園デイサービス

担当者:サービス管理責任者 専野 大智、生活支援員 秋月 智香子、渡邊 孝司

施設・事業所紹介

地域生活を送る主に身体障害をお持ちの方々の<もっと楽しく過ごしたい>、<体を動かしたい>、<お風呂に入りたい>などの思いを実現するために、入浴や排泄、食事の介護やリハビリ専門職によるリハビリテーション、余暇活動の提供などを行っています。

また、特別支援学校等に通学している方々の<学校卒業後の進路を考えたい>、<学校以外の場所で社会経験をして欲しい>、<仕事等で学校へお迎えが出来ない>などの思いに応え、放課後や夏休み等の学校が長期休暇の時に、通所の利用者と過ごし入浴等の身体介護や余暇活動の提供を行っています。

生活介護、タイムケア共に明石市内、近隣地区の送迎サービスも行っています。

通所生活介護:1日の利用定員 30名(9時～16時) タイムケア:15時30分～18時

【取組内容について】

1 取組を行ったきっかけ

① 利用者の障害特性への対応

主に身体に障害がある方を対象としていますが、近年、強度行動障害、高次脳機能障害、精神疾患等を有する利用者が増加傾向にあり、専門的な知識を身に着ける必要性が高まってきています。正規職員は外部研修へ参加する機会もありましたが、個々の直接的な支援への導入が難しく、また非常勤職員は学ぶ機会が少ない為、統一した支援の実施が困難となっていました。

② 特定職員への負担増加

事務業務や利用者の支援について、特定の職員しか実施出来ない業務が複数あり、業務の内容に個人差が生じていました。また残業時間が増えることもあり、身体的・精神的なストレスの蓄積に繋がっていました。

2 具体的な取組内容

- 定期ミーティングの時間を用いて、各種疾患や障害特性、福祉制度などについての理解を深める為の学習機会を設けました。
- また、正規職員中心に行っていたケース検討会議に非常勤職員も参加し、利用者個々の支援の方向性について共有する機会を設けました。
- 利用調整等パソコンを実施し行う業務は、様式の変更、自動化を図りました。

- 同じ業務を連続して行う事がないように、分散した業務分担の作成を行いました。
- 職員全員が同様の業務を行える様に役職者が中心となり指導・助言を行うとともに、職員配置の工夫を行いました。

3 成果と評価

- 障害の特性を理解し、ケース検討会議にて支援の方向性を共有したことで、支援の目的や留意点などを考慮しながら関わりを持つことが出来る様になってきています。結果、利用者の支援や活動内容にも個別性を持つ事ができ、利用者自身の意識や様子にも変化がみられる様になりました。
- 職員個々にかかる身体的・精神的負担の分散に繋がり、腰痛や体調不良で休む職員が減少しました。
- 職員全員が同じ業務に入れる様になりフォロー体制が強化されたことで、有給休暇制度を利用しやすい環境となり、取得率も向上しました。結果的にワークライフバランスの推進が図れ、従業員の離職率の低下、女性従業員の定着率向上にも繋がっています。

4 今後の課題、他の施設・事業所へのアドバイスなど

- 利用者の障害特性や業務体制等について、より理解を深め新たな視点で業務を行えるように、事業所間交流を図り他施設の取り組みを参考にしていきたいと思っています。
- より良い在宅・地域支援を行う為には、利用者の障害特性のみならず生活背景等にも着目していく必要があると考えます。その為、家族や関係機関との関わり方の検討、担当制の強化を図っていききたいと思っています。